

あの頃の風景

おくのほそ道 第11回

江戸時代の街並みが今も残る 静かな町「出雲崎」

パシフィックコンサルタンツ株式会社 / 経営企画部
油谷 百百子 ABURAYA Momoko (会誌編集専門委員)

『荒海や 佐渡によこたる 天の川』



① 昭和初期の出雲崎市街

46歳の芭蕉が門徒曾良を伴い、出雲崎へ立ち寄ったのは1689(元禄2)年7月4日(現在の8月18日)。その際、大崎屋で一泊し、流刑の地である佐渡島と年に一度の橋を架ける七夕の伝承への思いから、この歌を詠んだと伝えられている。

出雲崎町は、南北に細長く伸びる新潟県の海岸線のほぼ中央に位置する。1616(元和2)年には幕領支配の拠点として、最初の代官御役所(陣屋)が設置された。江戸時代の出雲崎は約3.6kmの街道沿いに2~3万人が住んでおり、佐渡の金銀の陸揚げ港、北前船の発着港として栄え、北国街道の宿場町として多くの人が行き交っていた。そのため、この地域一帯の政治、経済、文化、交通の中心都市として、越後一の人口密集地であった。

海岸地区は山と海に挟まれた100~200mの狭い土

地であり、かつての北国街道が海岸線に並走している。この狭い土地に多くの人々が住む方法として、間口が狭く奥行きの長い「妻入り」の町屋が多く建てられた。道路に面して、屋敷が広く取れないこの地区では、「妻入り」形式よりほかに方法がなかった。また、海から直接舟が家の中に入り入れられる「舟入り」の形をとっていた。当時の町屋は間口の幅に応じて税金がかかるため、間口3間(5.4m)が一般的であったが、1758(宝暦8)年に出雲崎の名主の家に生まれた禅僧で歌人の良寛の生家・橋屋は13間半(24.3m)だったといわれており、その繁栄ぶりが窺い知れる。

出雲崎では、家々が密集しているため火災が起きると延焼は避けられなかった。しかし地理的な制約から、何度も火災にあいながら今も当時の街並みが残っている。

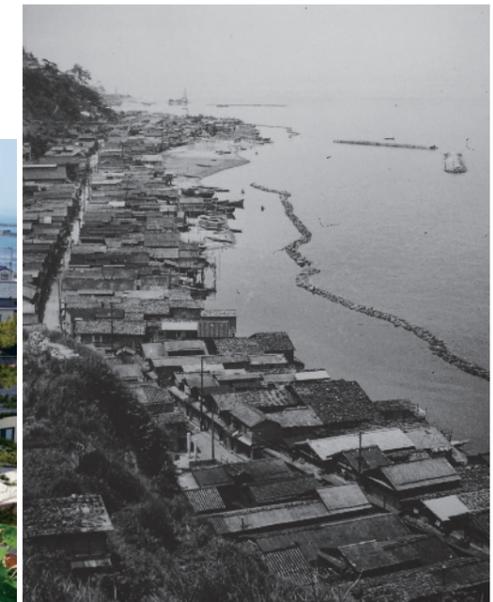


②(上) 現在の出雲崎・岩船。写真③の右の建物と現在の右の建物は同じ。当時の海が埋め立てられ国道352号線になった

③(左) 昭和初期の出雲崎・岩船

④(右) 昭和30年代の出雲崎

⑤(下) 現在の出雲崎



1996年3月には旧建設省の「歴史国道 北国街道出雲崎宿」に選定され、同年6月には新潟県の「景観形成推進地区」にも指定された。そのため町は「街なみ環境整備事業(国庫補助)」を活用し、2003年度から道路の美装化や看板の設置など街並みの修景と併せて、防火水槽や排水路整備といった住環境整備を進めている。

しかし、町の人口は年々減少し現在は5,000人弱のため、過疎化による空き家や空き地が増加し、歴史的な街並みの存続が危惧されている。そのため、2007年4月に「街なみ整備助成金交付要綱」を制定し、景観に配慮した住宅などの整備を行う個人に助成し、街並みの保存、活用が積極的に行われる取り組みを進めている。

地元住民を中心とした「出雲崎妻入りの街並景観推進協議会」では、緑化推進や広報誌の発刊、町屋を利用した「街並みギャラリー」を開催し、歴史書には載っていない出来事や言い伝えを看板にして町中に設置した。

散策を楽しみながら町の歴史に触れることができる。

築90年以上の妻入り形式の家に上らせて頂いた。高い天井と明かり取りの窓があり、開放感のある素敵な住宅であった。今も江戸時代の街並みが残る出雲崎。地元への思いに溢れた温かい人々が、この町の歴史と共に暮らしている。

今回の「あの頃の風景」は富山県高岡市です。

- <参考文献>
1) 『出雲崎町史』通史編 上巻・下巻・資料編 出雲崎町史編さん委員会 1993年 第一法規出版
2) 『出雲崎町芭蕉園「銀河序」建碑60周年記念資料集』越後出雲崎町 奥の細道 天の河俳句大会実行委員会 2014年

- <取材協力>
1) 出雲崎町 八木茂/磯部友記雄
2) 出雲崎町教育委員会 妻入り会館

- <写真提供>
①、③ 磯部友記雄 ②、⑤ 油谷百百子
④ 撮影:太古勇 提供:妻入り会館